

# E 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。  
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。  
なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

文章を書く時は、日本語も外国語として取扱わねばいけない。私たちは、外国語の勉強を通して、日本語を一種の外国語のように取扱う地点に立つことが出来るのである。言い換えれば、外国語の勉強は、日本語で文章を書く上に大きなプラスなのである。これが民族としての日本人の全体に当て嵌まるか否かは、専門家に尋ねてみないと判らないが、少くとも、私自身にとって、これはよく当て嵌まる。普通の順序とは少し違って、私はドイツ語、フランス語、英語……という順序で外国語を勉強して来た。幸い、外国語の勉強は好きでもあり、専門の仕事の必要もあって、私は永く外国語の本を読んで来た。もうズイブン慣れている筈である。しかし、何年経っても、それが母国語との差異なのであるか、サツと眼を通しただけでは、何も見当がつかない。眼へ飛び込んで来る感じというようなものが全くない。日本語の本なら、パツと判る、というより、パツと判つたような気持ちになれる。外国語の場合は、特に以前はそうであったし、今も不得意な外国語ほどひどいのだが、私は数式を解くのと同じ態度で読んでいる。外国文の一句が方程式のように見え、一語一語が数字のように見えて来る。訳語の判っている単語はよいが、判っていないものは、辞典で調べねばならぬ。判っているのは既知数で、判っていないのは未知数である。単語の意味が判っても、沢山の単語を結び合わせている関係となると、これは文法によって解釈しなければならぬ。数式を解く場合も論理が働いているが、外国語の場合も論理が文法と一つになつて働いている。辞典と文法とを頼りにして、私は全く理づめの方法で外国語の文章を読んで行かねばならぬ。事実、私はこのような方法で読んで来た。

ここで、どうしても、ジャツカンの問題(ロ)が現われる。外国人が日本語の文章を読む時は、やはり、数式を解くような態度になるものであろうか。日本人でも、日本語の文章を読み慣れていないと、数式を解くような調子になるものであろうか。漢字のような象形文字とアルファベットのような標音文字との違いが物を言っているのであろうか。しかし、今は、これらの問題に立ち入るよりは、外国語の文章という数式を解く努力を重ねているう

ちに、私自身、数式を組み立てるようなつもりで日本語の文章を書くことになってしまったという事実が大切である。数式のような文章が良いか悪いか、好きか嫌いかについては多くの意見があるであろう。私にしても、数式でありさえすればよいと主張するつもりはない。しかし、知的散文としての論文である以上は、数式が骨格にならねばならない。わざと形を崩すのも、洒落しゃれるのも、読者を楽しませるのも、骨格の修業が済んだ後の話である。私はそう信じている。幸か不幸か、<sup>(1)</sup> 日本文の骨格を学ぶために、私は外国文という遠い迂路うろを歩まねばならなかった。文章を書き始めるというのは、幾何学の勉強の出発点に立つことである。どんなに小さな狂いがあったとしても、それでお仕舞しまいになる。書き始めのところでは、数式を組み立てるような、数式を解くような態度が特に必要であると思う。

それにしても、日本語の世界と外国語の世界とは、何事もひどく食い違っている。ドニ・ユイスマンは、定義から始めるのは、「重大な誤謬ごびやう」である、と読者を戒めている。また、<sup>(注1)</sup> こうも言っている。「定義から始めるのは、悪い方法である。」私も論文の書き始めと幾何学の初歩とを比較しては来たものの、最初に堂々と定義が現われたら、これでは、文字通り、幾何学になってしまう。昔、スピノザ<sup>(注2)</sup>（一六三二年—一六七七年）は『幾何学的秩序によって論証された倫理学』という本を書いたことがあるが、無闇と小スピノザばかり現われても困るであらう。しかし、親切なドニ・ユイスマンがわざわざ戒めているところを見ると、フランスでは小スピノザが多いのに違いない。沢山の小スピノザが現われる危険がなかったら、彼はこうは書かなかったであろう。

ここまで書いて来て、私は大学生であった時のことを思い出す。怪しげなフランス語を頼りにして、フランスの社会学か哲学かの本を読んでいた時のこと、私は par definition（定義によつて）という言葉にぶつかった。その後も、気づいてみると、方々でこれに出会う。英語やドイツ語の本では、あまり見かけることがないようである。もつとも、元来、par definition という言葉に、私が感じたような重たい意味があるものか、もつと軽く慣用句のように用いられているものか、その辺は明らかでないけれども、とにかく、par definition という言葉が現われるより前に定義があつて、その定義に従つて、話を進めていることだけは判る。自分の使う言葉の意味

を決め、決めた上は、それに責任を持って行くことである。par définition という言葉に初めて出会った時、私は、西洋人の文章と私たちの文章との違いというものを厭いとになるほど感じた。

定義と言え、誰でもアリストテレス(注3)のことを考える。アリストテレスにとつて、定義とは、物の本質を現わす方式であり、本質は、あの有名な類と種差とから成っており、この考えはスコラ(注4)哲学を通して今日に及んでい(注5)る。パスカルによれば、定義は、「われわれの思惟のうちに生まれるところの、また、われわれが言葉の混乱について語る時に生まれるところの混乱を救うもの」である。フランスには、こういう定義の伝統が生きているのであろう。そこから小スピノザが現われる危険もあるのであろう。明らかに、ドニ・ユイスマンは定義過剰を恐れている。

しかし、私が恐れるのは定義不足である。私たちは、もつと言葉を大切にしなければならぬ。自分の使う言葉に責任を持たなければいけない。それには、一度は、次のような点も考えておいた方がよいと思う。画家が花を写生する。画布の上に美しい花が現われて来る。画布の上の花は、実物の花に似ている。近頃は、あまり似ないように描く画家も少くないが、それでも、実物の花と画布の上の花とは何処か似ているであらう。彫刻家が若い男の立像を作っている。この像はモデルになつている実物の人間に似ている。仮に似ていなかったとしても、やはり、この像は人間というものに似ている。ところが、言葉では、事情が全く変わつて来る。「花」という言葉は、いくら見つめていても、実物の花に似たところはない。「若い男」という言葉も、実物の若い男と何一つ共通のものはない。漢字は象形文字だというような議論を持ち出しても、役には立たない。このように、絵画や彫刻と違つて、言葉は全く□□なものである。□□なものであればあるだけ、言葉を使う時は細心でなければいけないのだ。全く実物に似ていない文字を使って、私たちは実物を現わさねばならないのである。

しかし、右のような例は、まだ仕合わせの方であらう。なぜなら、私たちは実物の花や若い男を眼で見ること、手で触れることが出来るから。それらのものは実在するから。これに反して、「良心」、「運命」、「批判」というような言葉になると、これらの言葉が指示しているものは、眼で見ること、手で触れることも出来ない。これら

のものは、花や若い男と同じような意味では存在していないものである。だが、無ではない。無ではないが、言葉に身を託してのみ存在することが出来るもので、それを現わす言葉がなければ、存在することが出来ないのである。言葉だけが頼りである。「良心」も「運命」も「批判」も、言葉となつて初めて存在する。こういう事柄を論ずるとなれば、言葉の取扱はいよいよ慎重でなければならない。言葉の上に狂いが出来れば、実物の良心も運命も批判も忽ち狂い出すのである。

(清水幾太郎『論文の書き方』による)

(注) 1 ドニ・ユイスマン——フランスの文学者(一九二九〜二〇二二)。

2 スピノザ——オランダの哲学者(一六三二〜一六七七)。

3 アリストテレス——古代ギリシアの哲学者(前三八四〜前三二三)。

4 スコラ哲学——西洋中世の教会や修道院の付属学校(スコラ)で研究教授された学問。

5 パスカル——フランスの哲学者(一六二三〜一六六二)。

## 問

(A) 線部(イ)・(ロ)と同じ漢字を含むものを、左記各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

(イ) ズイ	1 旅行にズイコウする	(ロ) ジャツ	1 カンダカい声
ズイ	2 ケンズイシとして海を渡る	カン	2 新聞のチヨウカンを読む
3 シンズイを極める	3 カラスのギョウズイ	3 ジャツ	3 人の意見にカンシヨウする
4 カラスのギョウズイ	4 ズイ	4 ショウ	4 彼はジャツカン十歳である
5 ズイ	5 ズイ	5 ショウ	5 カンセンシヨウを予防する

(B) —— 線部(1)について。筆者はなぜそのようにいうのか。その理由を本文中の表現を用いて、句読点とも三十字以上四十字以内で説明せよ。

(C) —— 線部(2)について。ここでいう「スピノザ」の含意として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 スピノザの生き方を妄信して、倫理学の書物を書く人のこと。
- 2 スピノザの幾何学的な考え方の受け売りで、定義に固執した書物を書く人のこと。
- 3 スピノザの作品を模倣して、幾何学とは何かに関する内容が薄い書物を書く人のこと。
- 4 スピノザを批判して、必要最小限の定義を活用した書物を書く人のこと。
- 5 スピノザの論理を誤認していても、内容豊富な書物を書く人のこと。

(D) —— 線部(3)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分の使う言葉の定義を厳格に決めないと、幾何学として筋の通った論文にならないから。
- 2 定義の伝統を守ることと責任をもつためには、言葉の意味を定めなければならないから。
- 3 物の本質を現わす方式である定義がないと、物の本質をとらえられなくなるから。
- 4 言葉の意味が決まらなないと、自分の使う言葉に責任をもてなくなってしまうから。
- 5 自分の使う言葉の定義が不足することで、西洋人の厳格な文章に近づけなくなるから。

(E) 空欄  にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 限定的
- 2 拡散的
- 3 具体的
- 4 抽象的
- 5 本質的

(F) —— 線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 「花」を表す言葉に狂いが生じると実在する「花」の見え方も狂い出す。
- 2 「花」のように実在する物も言葉にすることで始めて可視化できる。

- 3 「花」も「良心」も言葉にしないと実在しない。
  - 4 「花」という言葉は、実物の「花」と共通点はない。
  - 5 「花」を表す言葉と異なり、その言葉に対応する実物がない。
- (G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 日本語の本がサッと眼を通しただけで判ったように思えるのは、経験的に全体の構図が一気に読み取れるように思えるからである。
  - ロ *par définition* という言葉を使うようなフランス人の文章から、言葉の混乱を救うために定義を重視する伝統を学んだ。
  - ハ 絵画や彫刻は実物に似ているが、漢字も象形文字であることから日本の言葉もどこか実物に似ている部分がある。
- ニ 辞典を最大限活用すれば、未知の外国語の論理を解き明かすことができる。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

静寂のなかで、居心地の悪さに耐えられず、意識的・無意識的にメディアにアクセスするという経験はないだろうか。<sup>(1)</sup> 静音環境だけではない。満員電車のなかでみんながスマホと向き合っているのは、周りに人がたくさんいても疎外感や孤独を覚えているからかもしれない。聞くわけでもないのに、心配事から気を逸らし、孤独を避けるために、寝つくときもメディアをつけっぱなしにするという人がいる。ジョー・タッチは、無音環境は、社会的な静寂、すなわち社会と切り離されているという感覚を人に抱かせがちだと指摘している。

人の声が主要な要素になるラジオは、静寂を避けるとともに、誰かがそこにいるような共在感覚や、一人ではないという寄り添いの感覚を人々に与える。十歳前後の女子を対象におこなわれたウイスコンシン大学の実験でも、ストレスを感じたあとに母親と電話で話した子どもは、母親にインスタント・メッセージを送った子どもよりも良好な人間関係の形成と維持に関与するホルモンのレベルが上昇する一方、ストレスのバイオマーカーであるコルチゾールのレベルが低下したという。この実験では、<sup>(2)</sup> メッセージの内容ではなく声そのものが不安の解消に寄与しているのではないかと結論づけている。メールでのやりとりが誤解を招きやすかったり、絵文字で表情が補われたりすることはこれまでの研究でも知られているとおりで。また、日本語でも英語でも「声」という言葉は、人の感情や意見の表出を意味する用法がある。

NHKの『<sup>(3)</sup>ラジオ深夜便』(一九九〇年)は安心感を与える声のコンテンツの代表例だろう。この番組は、眠れない高齢者をターゲットに、パーソナリティーの<sup>(4)</sup>オダやかな語り口が安心できる雰囲気を作り出している。番組パーソナリティーを務めていた宇田川清江も、病院で深夜に放送を聞く入院患者の様子や、家族がいても会話がなかったために夜のラジオからの語りかけに返事をしてしまうというリスナーのメッセージを振り返り、一人きりの空間で深夜にラジオを聞くりスナーたちについて思いを馳せながら放送していたと述べている。この番組がリスナーに受け入れられている理由について、文化人類学者の真鍋昌賢は、伝える内容が何か、伝わったか否か

という基準では測れない、「安心させる」「寄りそう」役割を言葉が果たしていると指摘している。実際、オーストラリアでの高齢者へのインタビュー調査でも、ラジオを聞く理由として、情報の取得やエンターテインメント以外に、「一人でいたいけれどもどこかで世界とつながっていたい」「友人のようなつながり」などの寄り添う感覚がラジオ聴取に求められていた。ドイツでの若者のラジオ聴取をめぐる調査でも、沈黙の忌避、孤独の解消が主な聴取理由に挙げられていて、アメリカのポッドキャストリスナーに対する調査でも、四〇パーセント（複数回答）が孤独感を軽減するためにポッドキャストに関心をもったとしていて、十八歳から三十四歳の若年層で聴取理由の二位になっている。

それでは、<sup>(4)</sup>声のコンテンツを、リスナーはどのように聞くのだろうか。人の声は、肺や筋肉などの人間の身体の器官を通じて生み出される。そのために、人の声には心身の状況が少なからず反映され、文字で表現されるのとはまた異なる力をもつ。音だけのコミュニケーションのために、リスナーは、話されている内容だけでなく、話し手の声の高さや強さ、話すスピードや間、笑いや相づちなど、心理学で「パラ言語」と呼ばれる要素から注意深く情報を読み取り、その表情や様子を想像しながら聞いている。パラ言語は話し手に対する印象を大きく左右し、声の特徴は、顔から得られる印象よりもストレートにパーソナリティー認知に影響を与えるという研究もある。NHKラジオの朝のワイド番組『ラジオビタミン』（二〇〇八―二二年）のパーソナリティーを担当した村上信夫は、リスナーがほんの少しの鼻声を聞いて「今日は調子が悪いようですが大丈夫ですか」と心配してメッセージを送ってくれた例を紹介している。リスナーは声の調子や間などから多様に想像をはたらかせ、また、語りのなかに漂うしぼしの沈黙や間にも、語り手の状況や悲しみ、驚きを感じ取る。例えば商品が見えないラジオの通販が存続しているが、それは普段から聞いているパーソナリティーの口調や雰囲気から、リスナーたちが買うべき商品かどうか、注意深く確かめているからだということも、制作や営業の現場ではよく指摘される。

かねてから指摘されてきたことだが、ラジオでは内容を理解するうえで少なからず想像力を必要とする。その<sup>(5)</sup>意味で、声のコンテンツは読書とも似ている。<sup>(注2)</sup>ヴォルフガング・イーザーは、小説は小説というメディア自体で

成立しているのではなく、読者が書かれたテキストを読むことでようやく意味が生成されると述べ、読者とテキストが「対話」するコミュニケーションの場として小説を捉えた。書き手の意図を超えて、小説の読者は、ときに作者も気づかなかつた意味を見いだし、自由に自分なりの世界を頭のなかに描き出していく。

小説と同様に、海外の若年層のラジオドラマ聴取についての研究でも、彼らが各自の内面にイメージを構築しながら理解していることが報告されている。イメージを構築するための手がかりとなるのは、リスナーが日常生活やメディアで見聞きした物事だという。例えば、物語に家が出てくれば、子どもたちは自分の祖父の家や絵本で見た家を手がかりに、画像やコミックブック、あるいは映画のように想起しながら聞いていたという。

メディア論の祖ともいえるマーシャル・マクルーハンは、コンテンツに情報が十分満たされ完成された状態（高精細度）で届けられるメディアをホットメディアと呼び、情報量がさほど多くないかわりに受け手側の想像や参加を必要とするメディアをクールメディアと呼んだ。現在、音だけのメディアであるラジオは、リスナーからのメッセージやリクエストを受け付けるといった、受け手側の参与を可能にするクールメディアとして存在している。さらにコンテンツに関しても、小説と同様、聞き手は自らの経験やメディアで見聞きしたことをもとに想像しながら聞いているから、各自の内面に想像される世界はおそらく相当多様なものになるだろう。しかし同時に、先ほど子どもたちが物語を想像するとき、自分が見聞きした物事をベースに空想したという事例を引いたように、自分の経験と知識をもとに想像される音声コンテンツは、どこか自分にとって身近な状況をイメージして空想され、理解されるのではないだろうか。メディア論の藤竹暁も、テレビが社会的に共有され、主流のイメージを視覚的に提供するのに対し、ラジオは、リスナー個々に特有なイメージを喚起させると指摘している。

また、すべてを見せてくれる映像とは異なり、ラジオや声のコンテンツは、出演者の言葉であれ読まれるメッセージであれ、外から見ていただけでは理解できない内なる思いや葛藤が一人称で内面からトロ(4)されがちなメディアである。そしてリスナーのほうも人物の外見に惑わされることなく、想像しながら聞く。そのとき無意識に(6)ではあっても、誰かや何かを想像するという行為は、自分の実体験やメディア経験をもとに、そこにいるはずの

他者を理解しようとするのではないだろうか。

(小川明子『ケアする声のメディア ホスピタルラジオという希望』による)

(注)

- 1 ジョー・タッチ——社会人類学者。論文「ラジオのテクスチュア 自己と他者の間で」の著者。
- 2 ヴォルフガング・イーザー——ドイツの文学研究者(一九二六—二〇〇七)。
- 3 マーシャル・マクルーハン——カナダの英文学者。メディア理論家(一九二一—一九八〇)。

## 問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 線部(1)について。「静音環境だけ」ではなく、どのようなことを筆者は強調しているのか。最も適切なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 完全に無音の状態におかれたなら生理学的な不調に襲われるのは避けがたいこと。
- 2 雑音を排除すると同時に日常の不安さえも解消するのがスマホの利点であること。
- 3 周囲の静けさに精神の落ち着きが加わってこそ声のコンテンツに集中できること。
- 4 物理的な静寂から派生する心理的な孤立の感覚がメディア使用の誘因となること。
- 5 メディアにアクセスする動機は騒音の存在と大都市の群衆への埋没感にあること。

(C) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 時間をかけて推敲した手紙よりも、すぐに届いた雑なメールのほうが肉声を想起させ、安堵させる。
- 2 十歳前後の女子にとっては、母親がそばに寄り添って言葉をかけてくれることにまさる安心はない。
- 3 ストレスの緩和に関与するのは声という伝達手段であり、メッセージの中身はそれほど重要ではない。
- 4 メールの記事は不信を招きやすいが、発声をまねた絵文字は円滑なコミュニケーションをもたらす。

5 良好な人間関係を構築するには、インスタント・メッセージよりも音声通話を活用するべきである。

(D) 線部(3)について。この番組が聞かれている理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 深夜の孤独な空間に共在感覚をもたらすから。
- 2 パーソナリティーの滑舌が卓越しているから。
- 3 不在の家族との会話に代わる役割を担うから。
- 4 不眠の苦しみを前にした次善の策になるから。
- 5 身近な情報と娯楽がとても充実しているから。

(E) 線部(4)について。この問いの答えとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 意識をもつばら声の高低と強弱に集中させながら聞く。
- 2 口調や雰囲気から話し手の様子を思い描きながら聞く。
- 3 発話の内容はなおざりにし、パラ言語に留意して聞く。
- 4 話し言葉ならではのリズムに調子を合わせながら聞く。
- 5 話し手の心身の状態をケアし、共感を示しながら聞く。

(F) 線部(5)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 小説も番組も、内容の理解にはささやかな想像力で足りるから。
- 2 読者もリスナーも、イメージの構築によって意味を見出すから。
- 3 パーソナリティーの意図は作家の意図に等しい価値を持つから。
- 4 番組もテキストも、発信者と受信者が対話するための場だから。
- 5 ラジオも小説も、言語に依存したメディアにはほかならないから。

(G) ———線部(6)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 一人称を用いた自伝的な言説の主語。
- 2 隠された心情をもらす不可視の主体。
- 3 知覚できず想像できない外部の存在。
- 4 よく聞くラジオ番組のゲスト出演者。
- 5 寄り添いの感覚を味わう深層の自我。

(H) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 外国の小説を読むときは、その国の社会的なイメージを知っておくとよい。
- ロ 声のコンテツを理解するには、自分の経験や知識の想起が不可欠である。
- ハ 声の特徴が他人への印象に及ぼす直接的な影響力は、顔の特徴に匹敵する。
- ニ 世代や地域にかかわらず、孤独感がラジオ聴取の大きな要因になっている。
- ホ ラジオ番組が提示する精細度の高い情報は、リスナーの多様な参与を促す。

三 左の文章は、『うつほ物語』の一節で、幼い「いぬ宮」が、秘曲伝授のために母（宮）のもとから離れて祖母

（尚侍）や父（大将）と楼に滞在し、祖母に琴を習う日々を書いた場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

（解答はすべて解答用紙に書くこと）

（注1）

例の、夜さりの御台は、楼に参らす。大将、「苦しくや覚えたまふ。さはここに侍従ばかりは召さむよ」と聞

こえたまへば、「否。遊びをこそあらめ。なほこれを、宮の弾きたまふやうに、月の見ゆるまでこそ弾かめ」と

のたまへば、いとうれしと思さる。御台、下仕へ四人、取り続きで、裳、唐衣着て参る。上臈一人、前に三尺の几帳

さして、楼に上りて参らす。御賄ひは、例の大将仕うまつりたまへば、「あな見苦し。中納言、侍従を」との

たまへば、「何か」とて、賄ひ賄ひ参りたまふ。中納言は御衣かい取りて、参りて下りぬ。いぬ宮の御方にも、

同じきうるはしく、裳、唐衣着たり。乳母二人あり。大将取り次ぎて参りたまふ。御菓物ばかりを参りて、殊に

参らず。次に大将の居たまへる所に、かたちよく、髪長くて、髪一本に結ひたる男童の、よきほどなる四人、懸籠にして、南の方の山の木の根に造りかけたる反橋の方より参らす。少し下りたる高欄に出でて参る。絵に描き

たるごと面白し。

かくて、多くも弾き習ひたまひぬべけれど、ことさらに、ただ日に二つ三つを教へたてまつりたまひつつ過ぐ

したまふ。庭の山、前栽、いと面白くなりゆく。いぬ宮、南の山の方を見出だしたまひて、独り言に、「宮もろ

とも見え見せたまつらぬよ」とのたまふを、大将聞きたまひて、いとあはれと思して、「今この琴いによく習

はせたまひてむ時、渡りたまひて、もろともに御覽せむとぞのたまひし」とのたまへば、恥づかしうてももの

たまはず。夕暮れ、昼間などに、尚侍も大将もうち休みたまひて聞きたまへば、琴を習ひたまへる、いとになく、

いささか誤り違へたる所もなく弾きたまへり。二どころながら、いとかなしくゆゆしく覚えたまふ。

いかなる時にかあらむ、尚侍のおとどに、「下仕へをも召し、ちやを呼ばばや」と聞こえたまへば、召したり。

去年よりは殊に参らず。されど、うつくしがりたてまつりて、なほ参り馴らはしたりければ、あはれと思し、参

らせてしなりけり。琴弾き居たまへる御ほどの、またかかるを、大将、あはれに見聞こえたまふ。侍従来て、「御琴は弾かせたまへるべしや」と申したまへば、「弾きつべし。宮などのやうに、傍らかたはに置きて、常に今は弾きてむ」など語りひたまふなり。夜いたう更けたる月夜の、遥かに澄みたるに、二ところ弾き合はせたまひて、いぬ宮に同じ手を弾かせたてまつりたまふ。ただ同じ調べを弾かせたてまつらせたまふ。ただ同じごととなるを、うれしう、大将覺えたまふ。

(注) 1 夜さりの御台——夜のお食事。

2 侍従——侍従の乳母。いぬ宮の乳母。

3 遊びをこそあらめ——雛遊びなどをするわけではない。

4 御賄ひ——お食事の世話。

5 中納言——中納言の君と呼ばれる女房。

6 懸籠——外側のふちに懸けてはめ込むように作った小箱。

7 高欄——廊下や橋などに設けた欄干。

8 ちや——乳母の呼び名。

9 去年よりは殊に参らず——去年からいぬ宮は乳母の授乳を受けなくなった。

## 問

(A) ——線部(1)の内容として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 楼にいらつしやること
- 2 つらく思うこと
- 3 侍従がいななこと

4 悲しくないこと

5 聞こうとしないこと

(B) ~~~~~線部(ア)~(オ)のうち動作の主体が異なるものはどれか。一つ選び、番号で答えよ。

1 (ア) 2 (イ) 3 (ウ) 4 (エ) 5 (オ)

(C) 線部(2)の現代語訳を六字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(D) 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 何のさしつかえがあるでしょうか。

2 何か問題が生じるに違いありません。

3 何か心当たりがあるのでしょいか。

4 何のためなのか思い当たりません。

5 何なら代わっていただけませんか。

(E) 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 果物を繰り返し注文しても少しも運ばれて来ない。

2 果物を寺社にお供えするので楼へいらっしやらない。

3 果物だけを差し上げて他のものは持参なさらなかった。

4 果物ばかりを召し上がって特に他のものは召し上がらない。

5 果物を召し上がるばかりで他の日課がおろそかになった。

(F) 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 たくさんの曲をすでに習得なさっているに違いなければいけません。

2 たくさんの曲を早く教えていただきたいと願っているけれど

3 たくさんの曲を弾き習うことがおできになるに違いなければいけません。

- 4 たくさんの曲を弾き習おうとしても限界はあるだろうけれど  
5 たくさんの曲を一度に教えることは禁じられているけれど

(G) 線部(6)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 見せてさしあげられないよ。  
2 見せてさしあげられるよ。  
3 見せてくだらないよ。  
4 見せていただきたいですよ。  
5 見せてさしあげるといいよ。

(H) 線部(7)の動作の主体として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 大将    2 宮    3 いぬ宮    4 尚侍    5 乳母

(I) 線部(8)は誰と誰を指すか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 尚侍と宮    2 大将と宮    3 尚侍と大将    4 宮と中納言    5 大将と中納言

(J) 線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いとおしさは不吉さから来るとお思いになる。  
2 悲しいだけではなく不吉でもあるとお思いになる。  
3 悲しくても不吉でも気にしないとお思いになる。  
4 愛らしさより不吉さが気になるとお思いになる。  
5 不吉なまでにいとおしくお思いになる。

(K) 線部(10)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 じっくりしみ申し上げて  
2 うつくしさを賞賛し申し上げて

- 3 しみじみと思いをお伝え申し上げて
- 4 きれいなものをお送り申し上げて
- 5 かわいさを忘れないと申し上げて

(L) 線部(a)～(c)の助動詞の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 受身
- 2 自発
- 3 可能
- 4 完了

- 5 意志
- 6 命令
- 7 詠嘆

(M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ いぬ宮は尚侍の誕生日の祝賀で演奏するために琴の練習をした。
- ロ 尚侍は食事をしているところを人に見られたくないと思った。
- ハ 男童たちは南の山の景色を絵に描いて見せることでいぬ宮を慰めた。
- ニ 大将はいぬ宮の独り言を聞いていぬ宮をかわいそうだと思った。
- ホ いぬ宮は琴の練習に励んで尚侍から教わった曲を順調に習得した。

【以下余白】

